

PENインターナショナル親善大使になって

電子情報学科情報工学専攻2年

平林 裕子

中国に行く前に、私は3月に研修旅行でアメリカに行って、アメリカの聾教育システムやアメリカの聾者が聴覚障害をどのように受けとめているか知ることができた。そして、世界中の聾者との交流に興味をもつようになつた。大きさかもしれないが、高校まで健聴者と共に学んだ私は、この研修で生まれて初めて聾者の魅力に惚れたのである。それまでは「聞こえない」というたつた一つのこと非常に劣等感を持っていて、健聴者として人生を送りたいと思っていた。しかし、アメリカの聾者の、耳が聞こえなくても、障害にめげずに生きてゆく姿がたくましく見えた。親善大使として中国へ派遣されるのを機に、アメリカだけでなく、中国の聾者が聴覚障害をどのようにとらえているのかも実際に見てみたかった。これが私の中国研修の目的であった。

中国は初めての訪問だったので、どんな国か興味があった。行ってみてまず驚いたのは、中国という国そのものである。道幅は広く、交通量が多く、乗用車専用の他、自転車や歩行者専用の道路が広々としていた。しかし、その広大な乗用車用の道路にも自転車や徒步の姿があり、信号に従わずに道路を渡っている姿も見られた。また、色々な中国の雰囲気そのものが私を驚かせた。

天津理工学院聾人工学院や天津・北京にある聾学校を見学して、中国の聾教育システムについて実際に目で見る事ができた。中国の聾教育は日本と同じように口話教育であり、手話はサポートとして使用されていた。このような教育が行われていたということは、やはり中国の聾者も聴覚障害者であることを周りに隠しているのではないかと思った。でも、健聴者と共に授業をしている聾学校もあった。この学校では生徒同士との会話は手話であり、健聴者か聾者との区別が難しかったのは確かである。中国の聾教育システムは日本と似ているけれども、健聴者と一緒に授業を受けるというシステムがあるのは良いと思った。なぜなら、健聴者と聴覚障害が共に過ごすことによって互いに理解でき、その経験を将来に活かせるからである。

中国の学生との交流では、初対面なのに当然のように中国語で書かれた紙を見せられたので戸惑ってしまった。英語を書いても、英語が出来ない人もいたので、なかなかコミュニケーションができなかった。日本で買った中国語会話集の本を利用してコミュニケーションをとった。そしたら、会話集の中の単語に相応する中国手話を教えてくれた。中国手話は日本手話と似ているけれども、全く異なる面白い手話もあった。最終的にジェスチャーや手話でコミュニケーションがとれるようになり、楽しく交流をすることができた。日本の漢字を書いたら一発で通じたことがあり、とても驚いた。やはり、日本と中国の文化には歴史的な深い関わりがあったということを改めて知ることができた。

本来の目的であった中国の聾者は聴覚障害をどのように受けとめているのかというものを早速伺ってみた。そしたら「初めは、コミュニケーションの問題があつて、聾者という言葉は肯定的に受けとめられなかつた。今は、騒音など気にせず快適に生活できるなど良い面がたくさんあって聾者であることを誇りにしている。それから聾者同士の交流で、日本人の君に会えたことも嬉しく思つてゐる。」という言葉が返ってきた。これを聞いて、中国の聾者は聴覚障害を肯定的に受けとめているのだと感心した。

PENインターナショナル（高等教育ネットワーク）を完璧に作り上げるために、各の文化を知るべきだと思う。例えば、中国の聾者のほとんどが英語が出来ないので、コミュニケーションがスムーズにいかない。日本の漢字なら通じるが、アメリカ人には通じない。これらの問題を解決するには、やはり自国の文化をお互いに交換し合う経験が必要だと思う。世界共通の言語は英語なので、アメリカがまず日本や中国などにネットワークを用いて英語

を教えるという事も良いかもしない。PEN インターナショナルを作り上げていく上ではやはり、言語の違いが壁だと思う。でも、この研修のように他国との交流をする機会を増やし、世界中の聾者が楽しく学び合える理想的な大学ができる事を心から願う。